

看護研究・実践のつながり，ひろがり

増 島 麻里子（千葉大学大学院看護学研究科）

I. はじめに

看護学は、人間を対象としたケアを中心に追究する科学であり、学問の基盤として、医学、薬学、公衆衛生学、心理学、社会学等の知識や理論を必要とする学際的な学問として発展してきた。これら基盤となる学問をふまえ、教育機関においては、成人看護学、老人看護学、地域看護学等の専門領域における教育研究が行われ、看護実践の多くの場においては、臓器別あるいは外科内科等の治療別単位で専門性の高い医療が提供されている。複雑な課題や対象者のニーズに沿うためには、専門性を究めることは不可欠であるが、専門分化は俯瞰的にものごとを統合する力を弱め、専門領域の狭間にある問題に気づきにくくさせる点も有する。

本学術集会のメインテーマは、「つながり，ひろがる看護学」とした。看護学を追究する過程では、1つの看護専門領域にとどまらず、幅広い専門領域の看護学研究者や看護実践者との『つながり』が重要である。『つながり』には、実践の場では、職場の同僚間、多職種間等での『つながり』、研究の場では、看護学の多領域の研究者間や看護学以外の他学問分野の研究者間等との『つながり』があげられるであろう。『つながり』による交流は、新たな知識を得たり、考えや視野を広げるきっかけとなり、看護の知と技に『ひろがり』を生み出すと考える。

私自身、看護学にとどまらず、多様な学問背景をもつ様々な人との『つながり』によって視座が『ひろがり』、看護をより深く捉えなおすことが可能になると改めて実感する経験をした。本講演では、専門性を究めながらも、専門領域を越えて領域横断的に各専門領域の看護学研究者や他学問分野の研究者とつながり、視座をひろげた経験を紹介し、看護学における『つながり』と『ひろがり』について考えたい。

II. 社会における専門分化

文化人類学者のGillian Tettは、著書「サイロ・エフェクト 高度専門化社会の罫」¹⁾において、専門分化を“サイロ”と表現した。一般的にサイロとは、穀物を保

存するため、農場に設置された高い塔あるいは穴を意味する。加えて、心理状態を指すこともある。

Tettは、専門分化を一方的に批判する立場ではなく、有益性を論じながらも、世界有数の大企業や医療機関の組織が、複雑化する社会に呼応してサイロ化し、孤立化する例を示した。サイロは、物理的な建物や部署等の組織を意味するだけでなく、私たちの心の中や社会集団の中にも存在し、同じ集団の中で結束力を強める同時に視野を狭めると示唆されている。そこで、研究の取り組みを中心に、看護におけるサイロについて考えていく。

III. 看護研究を進める上で『つながり』と『ひろがり』を感じた取り組み

1) End of Life Careに関する研究プロジェクト

End of Life Careの概念は、世界においても高齢者数の増加が1つのきっかけとなり発展してきた。そのため、日本のEnd of Life Careについて考える上でも高齢化に着目する必要がある。我が国の65歳以上の高齢者の割合は、2005年から世界トップとなり、2060年には65歳以上の人口が日本の全人口の39.9%に達し、2.5人に1人が65歳以上になると推計される²⁾。日本は世界のどの国もこれまで経験したことのない超高齢多死社会を迎えている。高齢者が最期を迎える要因は、主にがんを含む慢性疾患に起因する。慢性疾患の経過は、がんのように死の数ヶ月前から急激に身体機能が低下するプロセスや、心不全のように悪化と回復を繰り返す等、多様なプロセスをたどる。生死を左右する病を有さなくとも老いと共に心身の機能が衰え、死を迎える者の増加も見込まれる。したがって、人生の最期の過ごし方は、どのような健康状態にあるかによって大きく変化すると考えられる。

そこで、将来の日本を見据え、2011年からEnd of Life Careに関わる研究プロジェクトを開始した。“第一期”は、2011～2014年に取り組んだ研究課題「生活文化に即したEnd of Life Care—慢性疾患患者と家族の生き方を支えるケアとエビデンスの構築—」である。第一期の研究組織では、End of Life Care看護学、がん看護学、老

年慢性疾患看護学，在宅看護学，医療政策学等を専門とする看護学研究者6名，政治学研究者1名，法哲学研究者1名，社会教育学研究者1名が繋がった。看護学においても，多領域の研究者がサイロを越えて参画することで，私自身は自分の専門であるがん看護や成人看護学の視点のみならず，対象の捉え方の幅が格段に広がったと感じた。さらに，看護学以外の他学問分野の研究者との交流は，新たな視点をもたらした。End of Life Careは，いくら医療者が頑張ったとしても，それだけでは完結しない。政治学研究者による行政づくりや市民の視点，法哲学研究者から視る死の捉え方，社会教育学研究者の見地から医療機関中心のEnd of Life Care教育から市民教育への場の拡がりについて，深く論議することが可能となった。

“第二期”は，2015～2016年の研究課題「超高齢社会におけるエンド・オブ・ライフケア学の確立と人生を豊かに生ききるアドバンスケアプランニングの社会実装」である。この研究課題は，第一期の研究課題をさらに発展させるものであり，研究組織は，看護学をはじめ，法哲学，政治学，医学，工学，園芸学，医療経済・政策学，倫理学，教育学等の9学問領域10看護領域の計30名ほど研究者が繋がった。疾患や健康状態に関わらず，自宅や病院の暮らす場やコミュニティでの生き方，End of Life Careを促進する教育，制度，行政へと視座を広げ，多角的な視点でケアを考えるに至っている。

2) リンパ浮腫ケアに関する研究プロジェクト

リンパ浮腫とは，リンパ管やリンパ節の閉塞や狭窄，損傷等による輸送障害によってリンパ液の流れが滞り，たんぱく成分を多く含む組織間液が皮下組織に過剰に貯留し，むくみが生じる状態である。日本におけるリンパ浮腫患者は約10万人以上と推計され，多くは乳がん治療後の上肢リンパ浮腫，婦人科系がん治療後の下肢リンパ浮腫が大半を占める。リンパ浮腫は，ひとたび発症して重症化すると，治りにくい性質があるため，早期段階で発見し，適切な治療をすみやかに導入する必要がある。

リンパ浮腫の診断は，リンパシンチグラフィ，超音波検査等によるが，最も簡便な方法はメジャーによる四肢の周径計測である。しかし，周径計測は，誤差が生じやすく，患者または医療者が継続的に計測することが現状では難しいため，新たな視点からリンパ浮腫の早期発見法を開発することが不可欠となる。そこで，2014年12月に開催された千葉大学産官学連携イノベーションフォーラム「看工連携によるイノベーションー看護現場からのニーズ」にて，リンパ浮腫の早期発見法の必要性和課題を提起した。これをきっかけに，“リンパ浮腫”を

Key Wordとした看護学，工学，医学，産学連携研究推進ステーションに所属する学内研究者が繋がった。翌年3月には，学問分野を越えてリンパ浮腫を捉える「千葉大学リンパ浮腫研究会」が立ち上がり，活動を継続している。

IV. 多領域で関わる学際性の利点と課題

多領域の人々が関わる研究プロジェクトは，学際研究といえるのだろうか。近年，話題になる学際性とは何かを考えてみたい。

学際性（interdisciplinarity）とは，自然科学，社会科学，人文学における個別の専門分野（discipline）を越えるつながりを指し，専門性（disciplinarity），多専門性（multidisciplinarity），専門横断性（transdisciplinarity）とは異なる。学際研究とは，統合的主義的な見地によると，“疑問に答え，課題を解決し，単一の専門分野で適切に扱うには広範すぎるもしくは複雑すぎるテーマを扱うプロセスである。より包括的な理解の構築のために知見を統合するという目標を持ち，学際研究は専門分野を利用する。”³⁾と定義される。よって，領域横断的な多領域あるいは他学問分野の研究者が単に集う研究組織が，すなわち学際研究であるとはいえない。統合的主義的な定義による“知見統合”が既に確立し，学際的な学問分野といえる代表例は，分子生物学，地質生物学，持続可能性科学，心理言語学，民族音楽学等である。

前述した私自身の研究活動は，現段階では，多専門性，専門横断性の研究組織からなる活動に位置づくと考ええる。しかしながら，1つの専門領域や学問分野だけではブレイクスルーできない多角的な視点が得られたのは明らかである。また，多領域で関わる利点とともに，多領域で関わるからこそ『つながり』『ひろがる』上での課題にも気づいた。前述の研究活動を通して実感したことは，各専門領域での物事の捉え方や学問分野で用いる言葉，ゴール，アウトカムの理念は異なることである。多くの専門領域や学問分野で1つの活動に取り組む際は，まず各領域の得意分野を共有することが必要である。これは，多職種連携でも同様のことがいえるであろうが，各専門領域や学問領域で何を取り扱い，得意とすることは何かを表明し合うことである。また，各領域で相違する捉え方を認識することも重要である。特に，私たちが何気なく用いる簡単な用語（例えば“ケア”等）ほど，各々の捉え方は異なり，同じことを論議しているつもりでも相違に気づかないことがある。合意に至らなくとも相違に気づき，何を大切にその用語を用いているのかを共有することが要となる。そして，専門領域

や学問領域のサイロを越えて、最終的に目指す方向性を常に確認することにより、同じ命題をもって『つながり』『ひろがる』ことができるのだと感じている。

文 献

1) Gillian Tett: サイロ・エフェクト 高度専門化社会の罣,

文藝春秋, 2016.

2) 内閣府: 平成28年版高齢社会白書 (概要版): <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/gaiyou/pdf/1s1s.pdf> (2016年12月16日検索).

3) Allen. F. Repko: 学際研究—プロセスと理論—, 九州大学出版会, 2013.